

Juichi WAKISAKA Race Report

2013 AUTOBACS SUPER GT Round 2 -FUJI GT 500km RACE-

◆◆ 気持ちも新たに攻めの走りを完遂、4位フィニッシュ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	2位	4位

開催日：2013年4月28日-2013年4月29日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：110周（501.93km）

入場者数：予選日31,600名、決勝日48,500名、合計80,100名

岡山での開幕戦から1ヶ月経たぬ間に迎えた SUPER GT 第2戦。舞台となるのはトヨタ・レクサス勢のホームサーキットである静岡・富士スピードウェイ。大型連休に開催される恒例のイベントだが、今シーズンは連休前半にカレンダーが組み込まれた。ウィーク中はやや風が冷たいものの、比較的安定した好天に恵まれ、サーキットからも名峰・富士山の雄大な姿を拝むことができるレース日和となった。

第1戦からの短いインターバルながら、今回、チームでは富士に向けてのミーティングをいつも以上に時間をかけて行ってきた。より強く、より速くレースをするために何が必要なのか、どうすべきなのかを改めて見直し、ときにはデータを再読みし、ときにはスタッフ同士がじっくりと話し合うなど、あらゆる角度から出来得ることに尽力した。そして迎えた予選。まずQ1で脇阪がトップタイムをマーク！さらに石浦宏明選手もQ2で2番手のタイムを叩き出し、決勝は2番手からスタートを切る。ライバルとは異なる戦略で500kmの長丁場を戦い抜き、4位でフィニッシュ。レクサス勢の上位独占にも貢献することができた。



■ 4月28日(日)

09:00-11:00 公式練習
14:15-14:30 ノックアウト予選 (Q1)
15:09-15:21 ノックアウト予選 (Q2)

【公式練習】 3番手 / 1'32.060

気温 15 度、路面温度 25 度でスタートした公式練習。GT300 クラスとの混走ではまず石浦選手がコースに入り、セッティング確認を中心にクルマをじっくりと仕上げていく。その後、ステアリングを委ねられた脇阪がコースイン。1分33秒前半のタイムをコンスタントに刻み、フィーリングの良さを確認することになった。混走枠では6番手のタイムをマーク。GT300 クラスの専有走行後に行われたGT500 クラス専有走行では、脇阪が1分32秒060までタイムアップ。3番手につけ、手応えある形でセッションを終了している。



【ノックアウト予選 (Q1)】 1番手 / 1'31.977

迎えた午後の予選。Q1 のアタッカーは脇阪。全 15 台の上位 8 台が Q2 へと進出する。午後 2 時 15 分にコースオープンした予選だったが、気温 18 度、路面温度 32 度というコンディションを考慮するかのようになり、なかなかコースに向かう車両が現れない。一方、脇阪は満を持して開始 5 分後にコースイン。タイヤに熱を入れ、いざアタックへ！ と向かった矢先、最終コーナー立ち上がりでマシントラブルのため立ち往生した車両が出現。その回収のため赤旗中断の水入りとなった。

気を取り直し、再び集中力を高めてコースに向かった脇阪。与えられた時間は 5 分。続々とアタックを行う車両の中でベストラップをマークし、トップに浮上。ライバルも続々と自己ベストを更新する中、もう 1 周最後のアタックに向かう。脇阪はラストアタックでもさらに自己ベストを塗り替える渾身の走りを披露。そうして刻んだ 1 分 31 秒 977 のタイムは、見事、Q1 をトップで通過するものだった。

【ノックアウト予選 (Q2)】 2番手 / 1'31.432

Q1 でトップの座に立った No.39 DENSO KOBELCO SC430。Q2 に出走する石浦宏明選手も重責の中で奮闘する。気温 17 度、路面温度 30 度と若干数値が下がるコンディションで装着したのはやわらかめのタイヤ。残り 3 分を切った時点でトップタイムとなる 1 分 31 秒 432 をマーク。これでポールポジションが決定するかと思われたのだが、惜しくも後続でアタックをして

いた 36 号車 SC430 が石浦のタイムを上回り、実現ならず。しかしながら、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は 500km の長い戦いを見据え、フロントローからスタートするチャンスを手に入れることになった。

予選を終えた脇阪。今回は、Q1 での予選落ちを一時は覚悟しながら挑んだアタックだったと胸中を明かした。「このところ思うようにクルマに乗ることができず、その状況を監督や石浦選手に色々聞いてもらい、またチームスタッフやエンジニアなど、チームに関わる人たちにも話をしたんです。その中で、みんながガンバって僕の声に応えてくれました。朝のフリー走行でクルマを走らせたなら、僕がいやだと思っていた点がなくなっており、すごく良くなっていました。予選でもいい方のタイヤを履かせてもらい、それでアタックに行きました。結果、Q1 のトップタイムをマークすることができたんです。みんなへの感謝の気持ちをこのような形で返すことができ本当に良かったと思いましたね」と安堵の表情を見せた。

また、「今日の予選では、タイヤ選択において、僕が朝のフリー走行でニュータイヤを 2 セット装着したため、Q2 を担当する石浦選手がタイヤの選択をすることができなくなりました。そういう状況の中でも 2 番手を獲ってくれたので、とても感謝している」とチームワークに重きを置いてくれた後輩を労った。さらに、明日の決勝に向けては、「自信を持って戦いたい。決められた周回数をただ消化するのではなく、自分にしかできない走りを見せて石浦選手につなぎたい。みんなの力を合わせてここまで来たから、このままうまく回っていけばいいなと思います」と強いレースができる喜びを身体全体で感じている様子だった。



■ 4月29日(月)

08:30-09:00 フリー走行 (09:10-09:25 サーキットサファリ)

14:00- 決勝 (110周)

【フリー走行】 8番手 / 1'34.112

前日同様、早朝のサーキットにはキレイな青空が広がった。次第に薄曇りへと変化するも、安定したコンディションの中で、朝のフリー走行がスタートする。

気温 15 度、路面温度 23 度の中、まず石浦選手がコースイン。今回は 2 回のルーティンワークを伴うため、ピットでの作業も重要なファクターとなる。決勝を想定したクルマのセットを確認したのち、ピットに戻り、脇阪へとスイッチ。脇阪がセッション終了までドライブを続けた。

このあともサーキットサファリのセッションが設けられ、引き続き No.39 DENSO KOBELCO SC430 は順調に周回を重ね、近づく決勝レースに向けて万全に準備を進めることになった。



【決勝】 4位 / 8ポイント獲得（シリーズポイント：11ポイント、シリーズランキング：7位）

迎えた決勝。午後2時、気温21度、路面温度35度と今週末一番高い数値の中、110周、およそ500kmに及ぶ熾烈な戦いの幕が切って落とされた。

スタートドライバーの石浦選手は早速ポールポジションのNo.36 SC430に真っ向勝負を挑む。ピタリと追随し、隙あらば逆転、とばかりにチャンスを伺った。そして迎えた9周目。サイド・バイ・サイドの攻防戦から1コーナー手前でトップに立つことに成功。ところがコース上のあちこちで展開するバトルの影響を受け、11周目には再び36号車の先行を許してしまう。だが、その間に見せた激しいバトルにチームの士気が高まることになったのは言うまでもない。

レースは25周目を終えてNo.39 DENSO KOBELCO SC430がピットへと戻り、最初のルーティンワークを実施する。ライバルに先んじてのピットインだったが、これは前日の予選Q2で石浦選手がソフト系のタイヤを装着し、アタックしたことに起因する。ハード系のタイヤを選んだライバルたちよりも摩耗が早く進み、タイヤのライフが厳しくなるため、このタイミングでのピットインとなった。

しかし別の見方をすれば、早めのピットインにより、ライバルたちに比べ給油量が少なく、作業時間はより短縮できる。これをメリットとして活かすべくバトンを受け取った脇阪は、アウトラップから攻めの走りに徹する力走を見せた。そして他車が立て続けにピットインを行い、1回目のルーティンワークが終了した頃には暫定トップの座へと返り咲き、見どころある戦いを観客にアピールした。

チームとしては2回目のルーティンワークは逆に給油時間が長くなることから、少しでも2位以下とのギャップを広げておきたい。だが、2番手につける36号車はハイペースで迫ってくる。しかし脇阪はそれを払いのけるかのように気迫ある走り続け、さらに5秒以上のマージンを作り上げて67周終わりでピットに戻ってきた。

滑り込んだクルマのドアを開けた石浦選手と脇阪がガッチリ握手。ピット作業は46秒強必要としたが、改めて闘争心を高ぶらせた石浦選手がコースへと向かった。ライバル達の2度目のルーティンワークが終わると、No.39 DENSO KOBELCO SC430は4番手のポジションで周回を重ねることに。ワンチャンスでポジションが入れ替わる可能性も高く、石浦選手は最後の最後まで諦めない粘りの走りを見せた。またそのチャンスにかけるべく、チームではソフト系のタイヤを選択。ところが、No.39 DENSO KOBELCO SC430はロングランが必須のため、終盤に入ると次第にペースが鈍り、逆にハード系タイヤを選択したライバルとの差がじわりじわりと広がってしまう。最後は出し得る限りの力を振り絞り、ポジションキープを果たしたNo.39 DENSO KOBELCO SC430は4位でフィニッシュ。表彰台まであと一歩という悔しい結果ではあったが、レースウィーク中に見せたチー

ムの高い総合力は、これからの新たなる躍進に向けて必ずや有効なものになるだろう。



今回、紆余曲折を経て「感じるクルマ」を手に入れることができた協阪は、存分な戦いを決勝で披露することになった。「Q1 をトップで通過したことで、メンタルの部分でもいい方向に向かい、戦うことができました。36号車とのバトルでも、前方にいるGT300 車輦をうまく利用して、後ろを引き離そうという攻めの気持ちを引き出すことができました。僕が気持ちよく走れるようにとチームが協力してサポートしてくれたのですが、中でも石浦選手は予選、決勝ともにしんどい部分を担当してくれました。感謝しています」とレースウィークを振り返った。また、「ここしばらく“乗れないクルマ”に乗ることがすごく辛かったのですが、その間、僕は自分自身でできることに取り組んできました。今日、改めて乗れるクルマでレースができたものの、4位で終わったことに関しては、結果として悔しい思いがあります。でもその一方で、メンタルの部分で自信が戻ってきたので、次からのレースではもっと完成度の高い戦いができると信じています。改めてチームのみんなと一生懸命頑張らなくては、と思っていますので、今後も応援よろしくお願いします！」と力強く宣言。セパンに向けて起死回生を誓った。

5月中旬に予定されていた韓国でのエキシビションレースがキャンセルされたことから、次の舞台は第3戦マレーシア・セパンに。灼熱の厳しい天候の下、戦いに挑む No.39 DENSO KOBELCO SC430。さらなる飛躍に期待がかかる。

次戦は、6月15日(土)・16日(日)に唯一の海外戦となるセパン国際サーキット（マレーシア）で開催される。

【Photo Gallery】



